
俺の f u c k i n g ホ ト ト ギ ス は な ん で 鳴 か ね え ん だ 糞 が ア ！ ！

真黒くろすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のf u c k i n gホトトギスはなんで鳴かねえんだ糞がア！！

【コード】

N6394K

【作者名】

真黒くろすけ

【あらすじ】

女性への欲求を断ち切り、高潔たらんとする青年が出会いを通して新しい自分に気づいていくというおはなし。

1 (前書き)

こんな風に考えたりもしたなあ、
みたいに気軽に楽しんでもらえた
ら嬉しいですぞ。

愛の谷間に溺れていては
ほんとに愛してやれようか

触れたことのない幸福には、いつそのまま触れずにいた方が幸せである。兄は言った。

夏も終わりにさしかかったこの時期になると兄の言葉を思い出す。あれはいい兄だったと、今になって思う。彼の主張が正しいかどうか分からないが、彼の足跡をなぞっていけばそれは私の幸せになった。少なくとも今まではそうだったのだ。

なまじうまい飯食ってぬくい布団で寝ているからそれ以下の暮らしには耐えられない。逆に初めからそれ以下の暮らしならその中の幸せはあるはずだし、実際に私は兄の言に違えずそういう幸せを築いてきた。

アルバイトでコツコツ貯めたお金は諸々の書物、テニス用品、家財など趣味を中心に徹底してつぎ込み、私なりの幸せに則したライフスタイルの構築に尽力してきた。

そして私は内省を怠らなかつた。常に自分の欲求の低俗なのと向き合い、第二司令塔（珍子）の要求と折り合いを一つつつ平静を中心に据えたあり方を実践しようと思つた。

長かつた。おかげで私は自分の劣等感を受け止め、自在にコントロールする術も身につけたのだ。精神、身体とも適切な自己管理の

もとで私は満たされた生活を送っていた。
これで私はようやく死んだ兄に顔向けができる、そう思った。

この夏の私の醜態はまこと言うに堪えないが、都合の悪いことを隠しては進歩はない。これも兄の言である。そして私を愛の恥辱に乱舞せしめた一人の女性に感謝する。

兄が生きていた当時私はネットにはまり込んでいて、現実世界ではありえないような女性の純白なイメージに胸を焦がしていた。

そんな私に兄はよく言った。毒されてはいけない、と。幸せは自分のあり方ひとつで決まるのだ、と。

そんな折、突然兄は死んだ。兄はライダーだった。友人と山へ行った際、不用意な運転が祟って崖下へ転落したと聞いた。

皆が悲しみの涙を流す中、私ひとりには感動にむせび泣いた。

ひたすら真の幸せをつかむために鍛錬を怠らなかつた彼を山が受け入れてくれたのだと思った。彼は人生で重要なのは長さではないことを知っていた。童貞の彼は自分の一番愛したバイクとともにオレンジ色に染まる山腹のカーブに思いをぶつけ、深い緑の山に抱かれて死んだ。

兄の真の思いに気付いているのは私だけだ。だから私には彼の遺志を継ぐ義務がある。齡17にしてそう誓い、とうとう今年、私はあの時の兄と同年となった。

梅雨も明けて本格的な夏の暑さにさしかかるころだ。私はいつものように朝早く家からいくらか距離のある貯水湖の外周をランニングしていた。

1 (後書き)

読んでくれてありがとう

2 (前書き)

女性の後ろ姿……

木々で縁取られた道を1時間ほど行くと、一周して大きな堤防に出、その上も広い歩道になっている。

自販機で飲み物を買ひ、タオルで汗を拭きながら欄干からの広大な貯水湖や奥にある森を眺める。昼とは違う勢いの新鮮な光に目を細め、欄干に体をもたせかけた私は今日一番の男前だ。

私のように早朝ランニングを行っている人はほかにもいて、堤防上の歩道にはクールダウンをする人たちが集まってくる。血気盛んな肢体をもてあます若者から、走りながら死ねたら本望だと言わんばかりのご年配まで。数こそ多くはないがそれぞれの思惑に思いを巡らせ、人間性と自然の雄大さの狭間にたたずむ自分を想像していると、いつしか卑屈な妄念から放たれる思いがする。

しばらくそうして朝の空気に体温を放射して、満足の高みで帰宅する。その手はずだった。

出口に向かおうと体を翻した時、横目に女性の影が映った。反対側の欄干で休憩をとる後ろ姿の彼女のピンク色のシャツと、きつちりなでつけられたような長い黒髪が光をちらちら反射するのが一瞬で脳裏に焼き付いてしまった。

私の胃の少し上のあたりがきゅっと締まった気がし、思わず自分を恥じた。常に心を穏やかに保って物事を冷静に見極めなければならぬ。感情に飲まれれば本質を見失う。兄の声が聞こえるようだ。

そう、あれはただのババアかもしれないじゃないか。

しかし良いババアもいることはわかってる。街中でおながが痛くなった時一番に気にかけてくれるのはババアだ。人に飴を押し付けたり、貪欲に値切りを行うなどその凶太さがひそかに家族の生活を支える基盤であることも気づいている。

だから私は表面的な美しさにこだわる女性より、ババアの力強さの重要性を解する女性を支持したい。だからこそ一目惚れなどというのは、私自身においては低俗の極みと心得ている。

その後その長髪の彼女を振り切るように急いで帰った。

まったくおろかな退却をしたものだ。あれでは現実問題から逃げているのと同じではないか。たといかなる女性に会おうとも平静を保つことも課題であるというのに私は目をそらした。

翌日から私はいつも通り早朝ランニングをすることにした。

2 (後書き)

ではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6394k/>

俺のf u c k i n gホトトギスはなんで鳴かねんだ糞がア！！

2011年10月6日23時00分発行